

## 千住大橋

せんじゅおおはし

昭和通りを北上して日光街道に入ると、やがて隅田川にさしかかる。これが千住大橋だが、新旧2橋が並列していて、下り線が昭和2年（1927）完成の古めかしいブレースドリブタイトアーチ、上り線が昭和48年に出来た新しい連続箱桁橋である。

ブレースドリブタイトアーチは、大正年間にドイツから入ってきた橋梁形式で、ハツ山橋（大正3年、品川）や六郷橋（大正14年、多摩川）など多数が架けられたが、近年架け替えて次第に残存例が減りつつある。現役でもっとも人目に触れやすい例としては、総武本線の松住町架道橋（No.87）がある。

この形式の橋を昔の術語でいうと鋼繫拱結構となる。今では発音も難しいような言葉であるが、結構はトラス、拱はアーチ、繫はタイつまりアーチの両下端を引張材でつないでいるという意味である。アーチが生まれた頃は、現代でもコンクリートや石のアーチに見るように、両端の橋台を水平に突っ張ることによって荷重を支えるものであった。鉄の橋が造られるようになって、橋台を突っ張る代わりに、アーチの両端を引っ張りに強い鋼材でつないでバランスをとる構造が案出されたのである。

千住大橋の歴史は古い。徳川家康が江戸入府後間もない文禄3年（1594）、というところ秀吉の天下の時代に、家康が奥州街道の往還の便をはかって、渡し船を固定橋に替えたものである。隅田川に本格的な橋が架けられたのはこれが初めてである。以後千住は奥州街道の宿場町として栄え、板橋、新宿、品川とともに江戸四宿の一つに数えられた。

徳川の江戸入府とともに生まれた千住大橋はまた徳川幕府の終焉も見送った。慶応4年、山岡鉄舟等に見送られた慶喜の駕籠は、謹慎蟄居先の水戸へ向けて千住大橋を渡って行った。「槍一本もこれなくその在様を見て涙を流さざるはなし」と当時の記録にみえる。

余談になるが、千住大橋の南側の常磐線南千住駅・隅田川貨物駅一帯は昔小塚原刑場のあったところである。いま面影をとどめるのは回向院だけであるが、処刑者のべ十万人という陰惨な歴史を刻んだ場所である。吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎等はここで処刑された。時代は移ろい、今この一帯は荒川区の基本構想により、今世紀内の完成をめざして、東京23区では最大規模の高層住宅や業務・商業施設の建設が始まろうとしている。

千住大橋から隅田川を下っていくと、千住大橋を横に引き延ばしたような白鬚橋（昭和6年完成）が架かっている。これも難しい術語でいうと突桁式鋼繫拱結構となるが、形式的には千住大橋と近い親類である。「墨堤十里花の雲」と桜の名所で有名だった墨田堤はこの辺から下流へ向けての一帯であった。

[NT]

竣工年月：昭和2年（1927）

所在地：東京都荒川区 - 足立区

河川名：隅田川

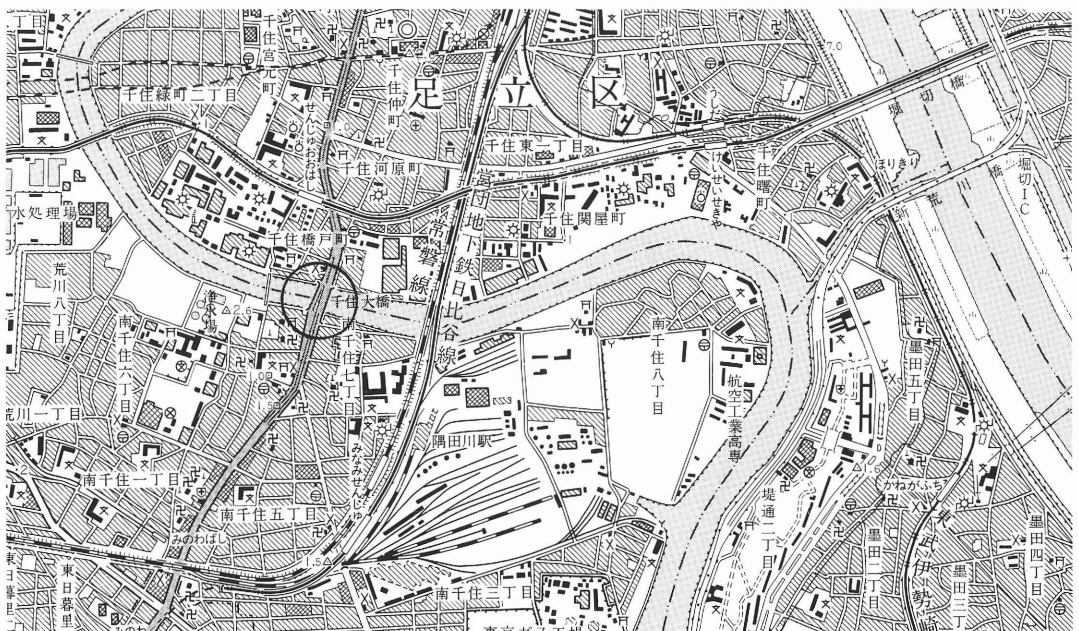
橋長・幅員：91.676m×19.350m（車道2×5.825m+歩道2×3.850m）

径間数・支間長：1×90.00m

形式：下路ブレースドリブタイトアーチ



〈写真提供・東京都建設局〉



(1:25,000 東京首部)